

未知のコロナに翻弄されて

袖村ふじを

安倍総理が全国の小中高へ休業要請したのが2月27日、翌週の3月2日から全国の学校が春休みまで臨時休業に入った。あまりに唐突な休業要請に戸惑うばかりであった。

予定していた学習が終わらない。卒業式はどうするのか。通知表は渡せるのか。目に見えないコロナウイルスの影響を最小限にとどめたい、子どもたちをコロナ禍から守ってやりたい一心で、暗中模索という表現しか思い浮かばないが、必死で知恵を絞りながら対応してきた。

その後、休業は延長され、大半の学校はゴールデンウィーク終了まで学校を閉じた。各都道府県の感染状況の違いから、学校の再開にはばらつきがあったが、6月にはほぼ全国の学校が教育活動を再開した模様である。

今まで経験したことのない異常な事態に学校は混乱の極みであった。「父親が長距離の運転手をしていて首都圏との往復をしているが、子どもを登校させていいのでしょうか」「姉が東京の大学に進学するので、アパートの手続きのために上京した。弟を登校させていいのでしょうか」「37・5℃ではないのですが、少し微熱があるようです。登校させていいのでしょうか」「法事のために東京から親戚が来たのですが、子どもを登校させて大丈夫でしょうか」

学校でも教育委員会でも訊かれてもわからないようなことが毎日のように起こり、つらい判断の日々が続いた。まったくもって混乱の極みであった。

山形県においても6月第3週の週末から県をまたいで移動が可能になり、さくらんぼシーズンと重なって堰を切ったように県外ナンバーが押し寄せてきた。新幹線つばさの乗車率は前週と比べて1・5倍に増えたとニュースが伝えていた。

岩手県は全国で唯一感染者ゼロだったが、7月29日に2人の感染者が出て、これで全国に感染が拡大した。岩手県では感染者が出るまでのその「0」のプレッシャーたるや想像を絶するものがあったらしい。

県内の4市町村が県外からの転校生を2週間自宅待機させていたということが大きな問題になった。学校で判断するには荷が重すぎるので、教育委員会として判断したようなのだが、教育評論家の尾木直樹氏が子どもの学習する権利を奪うような暴挙であると彼のブログで問題視していた。

結果として、転校生の学習する権利よりも、コロナという危険因子から子どもたちを守ることが優先されてしまったということだろうが、差別につながるような対応が、知らず知らずのう

ちに学校・教育委員会においてなされてしまったということは、まったくもって異常の極みであり、コロナ禍が組織の良識ある判断まで蝕^{むしば}んでしまったように感じたところである。

昼休みはTVの「ひるおび」を見るのが習慣になっており、北朝鮮が開城^{ケイセン}の南北共同連絡事務所を爆破するまでは毎日コロナ一色であった。コロナによる社会的な制限が緩んできたこともあり、北朝鮮のニュースは妙に新鮮に聞こえた。やったことは新鮮とはほど遠い不毛の一語に尽きるが、コロナでうんざりしていたので、フレッシュユナニュースソースと感じたのであろう。

その後、河井克行、案里容疑者による広島県の首長、県議、市町議員への買収疑惑と続いて、ニュースそのものは外の報道番組でも扱っていたので、新鮮味はなかったが、「ひるおび」で扱うことで、ようやく本来の「ひるおび」らしさが戻ってきたような気分になった。中には頭を丸めた首長もいて、坊主になるくらいならいっそのこと寺の住職にでもなってほしいと思ったものだ。

夢と希望に満ちた未来を創る政治であるべきなのに、選挙権が18歳まで下りてきて、政治というものが高中生にまですり寄ってきているのに、また、彼らにとっても極々身近なものでなければならぬ政治であるはずなのに、この様^{さま}はいったい何だと声を上げて言いたい。

学校は、臨時休業が長引いたため、7月いっぱいには登校しての授業となったが、学校は8月からようやく夏休みに入る。文部科学省では今年度プールを使用しての授業は行わないよう全国に通知した。せめて町の社会体育施設のプールは何とか開放してやりたいと思っていたが、どうしても3

密を回避することができないという理由から、町のプールも開放を断念するほかなかった。水遊びに夢中になる子どもたちの姿が目に見えなくて申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

アベノマスク、ソーシャル・ディスタンス、ウィズコロナ、アフターコロナ、GO TO TRAVEL、新生活様式。コロナ関連で浮上してきた言葉が思いつくだけでもこんなにある。毎日目まぐるしく変わる国や県の対応、コロナに翻弄^{ほんろう}される日々はまだまだ続く。